

2015年7月14日

## 意見陳述書

原告 森瀧春子  
(広島市)

### —核被害の原点から— 核と人類は共存できない

私はこの瀬戸内海に面する広島からやって来ました森瀧春子と申します。原爆投下の直前に県北の父の郷里に疎開し被爆を免れました。私の家族のうち被爆したのは父だけでした。父・森瀧市郎は広島大学（当時は広島高等師範学校）教授として、学生とともに学舎を離れ造船工場に動員されていました。父は爆風で飛散したガラスが顔面に突き刺さり、右目の視力を失いました。残る左眼をこじ開け、激痛に耐えながら目撃した地獄の惨状—原爆投下によって壊滅し去った街、人間の姿を失った人々の群れ、折り重なる死骸の山・・・核による人間否定の極限的悲惨の体験から、哲学者として核時代における人類の生きるべき方向を考え抜き「核と人類は共存できない」という核絶対否定の理念を得て、残る半生のすべてを反核運動、被爆者運動に注ぎました。この地にも足を運び伊方原発建設に反対する人々の輪に加わりました。

私が反核や反戦の運動に関わっている原点は、私の生まれ育った広島に対する1945年8月6日の原爆攻撃により無数の人たちが殺傷されたという厳然たる事実にあります。原爆は推定7万人から8万人という数の市民を一瞬のうちに殺戮し、その年末までに約14万人にのぼる数の市民が原爆のために死亡しました。その後も、さらに数多くの人たちが放射能に健康を冒され続け、苦痛の末に「遅れた死」をもたらされました。原爆慰霊碑に眠る原爆犠牲者の数は、氏名が判明しているだけでも2015年5月20日現在297,832人となっています。それだけではなく、生き残った人々の苦しみは、原爆孤児や原爆孤老に象徴されるように人間関係をも完全に破壊され、ケロイドのように心身に刻み込まれた傷跡や放射能被曝による後障害、次世代への影響への不安を背負わされ続けたことです。いかなる場合も、核兵器による市民の無差別大量虐殺は明らかに「人道に対する罪」です。

私は、インドのウラン鉱山採掘現場、劣化ウラン弾を撃ち込まれたイラクの現場、ネバダ核実験場の風下住民の現場、そして原発大事故により失われた福島の人々の生活・

健康・自然環境の現場など核災害の地を訪れて来ました。そこに見られるものは必ず、一握りの巨大資本の利益やそれを代弁する政治家のために理不尽に踏みにじられる民衆の犠牲の姿でした。

核は、その開発の入り口から出口に至るあらゆる過程で、甚大な被害を人間や環境に及ぼしてきました。ウラン鉱山での採掘、ウランの精錬、ウラン鉱滓の廃棄、ウラン濃縮過程、核兵器製造、核実験、核兵器使用、原子力発電の事故・放射能漏れ、原発労働、核廃棄物利用の劣化ウラン兵器使用などすべての場面で、深刻な放射能被害をもたらしてきました。

インドにおける核開発は、ウラン鉱山周辺に住む先住民の人権を踏みにじりながら深刻な環境汚染、人体への放射能被害を引き起こしています。私は現地を何度か訪れて専門家の協力のもとに実態調査や先天性障害児などの支援をしてきましたが、放射能による環境汚染、出産異常、多指・欠損指、眼球欠損、小頭症、巨頭症など先天性障害の多発、白血病・がんなどによる高い死亡率など悲惨な実態が明らかになっています。原発や核兵器の原料とするためのウランの採掘はインドのほかにもオーストラリアの先住民アボリジニー地域やアメリカ、カナダの先住民地域などで続けられてきています。いずれの地域でも先住民の生活、基本的人権を奪いながら放射能被害を押しつけてきています。

湾岸戦争に続きイラク戦争においても放射能兵器である劣化ウラン弾の大量投下がなされた結果、深刻な状況を引き起こしています。イラク戦争直前、直後のイラクへ赴き戦争被害や劣化ウラン被害調査や支援をしてきました。訪れる病院で見る多くの子供たちの苦しみ—白血病で末期症状を示す子どもたち、脳など身体のいたる所へのがん転移、心身に先天性障害を持たされた上に、様々ながんに苦しんでいく子どもたちの様子は、広島における原爆投下後の被害の状況と重なるもので、劣化ウラン兵器がもたらす放射能被害の凄まじさを示していました。劣化ウラン弾による放射能汚染は、採集し持ち帰ったチリ、土壌、水、尿などのサンプルの専門機関による分析によって明らかになっています。飲料水、土壌の汚染、白血病を患う子供たちの尿に取り込まれた劣化ウランの検出は、すでに顕著ながんなどの著しい発症増加の現状から今後の深刻な状況が懸念されています。劣化ウラン兵器は、核開発サイクルの出口での問題となりますが、原発燃料や核兵器製造に使用する核分裂性放射能元素 235 を取り出した滓の核廃棄物を利用した兵器であり、原発・核兵器と表裏の関係にあります。

福島原発事故後、現地を何度か訪れました。原発事故で取り返しのつかない被害を蒙った飯舘村をはじめ、伊達市、南相馬市の原町区、小高区、川俣町、福島市松川町などの核被災の現場を歩き、多くの被災した人々にも出会いました。イラクで使った放射線量計を日本国内で使うことになるとは予想もしていませんでしたが、各所で測定して歩

きました。2012年11月、事故後1年8ヵ月経った時点でしたが福島各地の放射線量は非常に高くイラクでの劣化ウラン汚染による放射線量値と同程度かそれを上回る数値を示し、福島各地では深刻な放射能汚染がきわめて広範囲に起きてしまっている事実を改めて愕然とさせられました。農業、牧畜業が放棄されている地域では自然の荒れが目立ち、原発事故災害に加えて津波被害地でもある南相馬市・小高地区などでは、震災後長らく避難指示と警戒区域指定のため遺体捜査にも入れない状態で、農地か沼地か区別もつかないほどの荒地には、あちこちに壊れた船や家、自動車などの残骸が集められることもなく放置されていました。

浪江町警戒区域の無人ゲートの横には、牧場が広がり数多くの牛たちがいました。そこで牛達に飼料を与えるため来ていた「希望の牧場」代表の吉澤正巳さんたちに出会いました。原発事故により放射線被曝をした牛は出荷できないままに、警戒地域に指定され、移動さえもできなくなりました。それゆえに、取り残された牛の多くは餓死・ミイラ化したり、生き残り野生化した牛も、国は殺処分の決定をしました。浪江町の400軒の和牛農家の人々は置いてきた牛への断腸の思いと米作りや野菜、果物など物づくりのできなくなった我が大地への思いでノイローゼになる人が多く、自殺者も出たということでした。被曝のリスクを負いながら牛の命を守るために餌をやり続ける吉澤さんの必死の訴えに釘付けとなり衝撃を受けました。その一部ですがどうか耳を傾けてください。

われわれは死を覚悟したときもあったし、生死の境目はいっぱいあった。原発事故の加害者であるオフサイトセンターはすぐに逃げ、東電も逃げようとしたし、国は情報を隠し、被害を増大されたわれわれは「棄民」なのだ。避難するときはまさに、国の戦争に巻き込まれた被災民のように、国の原発施策に追われる戦争避難民の気持ちで逃げたのだ。われわれは棄民なのだ。27箇所の避難所に7000人が避難し、2000人が県外避難をしているが、多くの避難民は生きる希望を失ってすでに部落のコミュニティは崩壊している。しかし、この無念の思いを背負って原発を乗り越え、原発を無くすために私は一生闘う。牛を殺処分させず飼い続け、牛たちと運命を共にする覚悟だ。原発事故後すでに、まだら状の斑点のある異常な子牛が八頭生まれている。研究機関と協力して生きた証明として追及していき、殺処分などの証拠隠滅をさせない。何処にも帰る場所のない警戒区域の怒りを、東電、国にぶっつけていく。被災地の難民がその体験を、無念を生む声であらゆる方法で伝えていく。これまで真実を隠蔽し、目隠しし、猿轡をはめて進めてきた原発の安全神話は吹っ飛んだ。牛を飼い続けることにいろいろと圧力がかかるが、農家が牛を飼って何が悪い、これは抵抗のシンボルなんだ。

研究機関や医療機関などの放射線管理区域規定ですら年間許容量は5ミリシーベルト以下であるのに、政府は、年間20ミリシーベルト以下の地域を避難指示解除準備地域として住民の帰還を進めようとしています。これではさらなる被曝を強いることとなります。

政府は、高速増殖炉サイクル研究に巨額な予算を計上し、核燃サイクルの維持推進や原発の再稼働、運転期間40年を超える原発の特別措置として20年の延長に道を開き最長60年運転を認めるなど、あくまで原発推進政策を押し進めようとしています。原発を稼働する限り、核燃料サイクル施設を運転しようとする限り、大量の使用済み核燃料の排出、再処理によるウラン、プルトニウムや高レベル放射性廃棄物が増え続けます。原発も核兵器も、劣化ウラン兵器も人間の基本的な生きる権利を根底から破壊してきました。核開発の過程で不可避に出される放射性廃棄物、特に原発の使用済み核燃料の再処理で排出される高レベル放射性廃棄物は、処理方法も廃棄場所も全く見通しのつかない状態にあります。各地の原発に溜められている使用済み核燃料はすでに満杯のところがあるにも拘らず、政府や電力資本は川内原発、高浜原発、伊方原発など原発の再稼働を強行しようとしているだけでなく、上関などに原発の新建設の意図さえ抱いています。そこで増え続ける放射性廃棄物のことや、核被害の拡大などは意に介しないのでしょうか。日本におけるプルトニウムの蓄積はすでに47トンにも達していますが、六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場や、高速増殖炉もんじゅの運転計画を進め、さらにプルトニウムを増やそうとしています。これは、日本が核兵器保有への野望を持ち、その可能性を保持するためと言われても仕方ありません。さらに安倍政権は、ベトナム、トルコ、アラブ首長国連邦、インドなど世界各国に原発の輸出を押し進めています。福島原発の重大事故など無かったかのような原発推進への強硬な姿勢からは、一部の巨大資本の利益、経済発展のみを露骨に追求し、原発被災者への賠償を後景に追いやり切り捨てる権力者の姿しか見えません。

2013年3月にも見た福島飯舘村での風景が脳裏から離れません。再開されたという小学校の前には、除染で出された放射性廃棄物を詰めたビニール袋の見渡す限りの山が築かれていました。これは「除染」ではなく「移染」であり、「除染」して20ミリシーベルト以下になったとして帰還を促すというパフォーマンスは「被曝の強制」につながります。福島の核被災者の「われわれは棄民だ」という憤りを共有しなければならぬと思います。原爆被曝者についても黒い雨による内部被曝の被害などを無視し切り捨てるのと同様に、原発被害についても被害評価、補償の矮小化を見逃してはならないと思います。

私たちは、人間の手に負えない負の遺産をこれ以上人類と地球に負わせてはなりません。核を利用するすべての段階で生じる放射能の内部被曝による人体への危険性は深刻

です。核開発の過程で生み出される共通の核被害・放射線被害の連鎖を断ち切るために、「核と人類は共存できない」という核絶対否定の理念に立って闘ってきた先人たちに学び、この未曾有の試練に立向いたいと思います。その一つとして「世界核被害者フォーラム」の広島開催を11月に計画しています。核廃絶、脱原発、ウラン兵器廃絶そしてすべての核被害者救援のため、世界の核被害者—ウラン採掘、核実験、核戦争、劣化ウラン、原発事故などによるヒバクシャとの情報共有と連帯が今こそ求められています。

巨大地震の危険に満ちたこの日本、四国の地にある伊方原発でフクシマの再現が引き起こされないという保証がどこにあるのでしょうか。瀬戸内海に面した伊方原発に今原子力規制委員会は3号機の審査書(案)を発表し再稼働への動きを加速させています。今生きる私達はこの瀬戸内海の恵みを、四国の自然を、人間が人間として生きていける場としての地球を自ら破壊することがあってはなりません。この海と大地と空を守り未来に引き継いでいく責任があるのだと思います。

核時代に生きる私達は、人間が核を絶対に否定していかない限り、核によって人間が否定されてしまうのだという事を忘れてはならないと思います。

\*\*\*\*\*

森瀧春子

世界核被害者フォーラム事務局長  
広島大学非常勤講師